

TSUNAGU

～学びの先の夢に向かって～

東大阪市教育委員会 小中一貫教育推進室



トピックス

小中一貫教育推進室だより「TSUNAGU」では、子どもたちの様子や教職員の実践をもとに、市内における小中一貫教育をはじめとした連続・一貫した教育活動の状況を共有していきます。

若江中学校校区「新たな不安は成長の証」

若江中学校校区では、一貫教育通信「わかたまっ子通信」を通して、家庭や地域に一貫教育の取組みの様子を紹介しています。

6月発行の通信では、第1回目定期テスト後の中学1年生の感想が取り上げられました。この学年は、昨年度わかたまデー(6年生の中学校登校)の中で、定期テストを経験しました。「小6時に中学校で経験したので、ルールが分かっている、緊張せずに、安心して受けることができました。」「経験していなかったら、急に小学校と違う感じのテストで焦ってしまおうと思った。」などの感想が記載されていました。



「わかたまっ子通信」

一方、12月発行の通信では、2学期末に実施したアンケートで、“中学校進学に対して不安を感じる”児童が、1学期末と比べ、増えていることが取り上げられました。原因として、11月に実施した定期テストの影響が大きいのではと分析されています。

若江中学校校区小中一貫教育コーディネーター石田先生は、「子どもたちは、定期テストを経験することでそのものに関する不安は取り除くことができたが、また新たな不安を感じていることがわかった。」と話されていました。

5・6年生の定期テストは、中学校のテスト形式に慣れ、中学1年生の1学期中間テストでの「つまずき」を解消することを目的の一つとしています。若江中学校校区の取組みは、6年生に中学校での学びに順応しようとする意識を生み出し、中間テストの際に感じる大きな段差の解消につなげることができました。また、教職員にとっても、小中・小小の学校間のつながりを意識した指導に生かすことにつながりました。

ただ、子どもたちの不安がなくなったわけではなく、別の不安を持っていることも把握しました。新たな不安を感じることは、子どもたちの成長の証であると考えます。このような取組みが、いつかは越えなければならぬ段差を、緩やかにすることにつながると、一貫室では感じています。

中学校区で作成した定期テストを、中学生と同じ時間で行う6年生



小中一貫教育コーディネーター (Co)

次のステップ「夢TRY科は、小中一貫教科であること」

Coは、小中一貫教科を意識した夢TRY科が実践できるよう、日々研究を重ね、各中学校区において活動しています。

市教委としては、夢TRY科を通して、授業者が楽しみ、子どもたち全員が学習に参加することを目標としてきました。訪問では、その姿が多く見られ、教材研究や授業準備など、授業に関わる先生方の熱意を感じることができました。

Coが参加する月2回の会議や希望者による勉強会では、次のステップとして、小中一貫教科であることを意識して授業することの重要性を共有しています。他教科でも必要な意識ですが、夢TRY科に関しては、これまでの積み重ねのない教科のため、

特に意識して授業をする必要があります。

子どもたちがこれまでどのような学習をしてきて、今後どのような学びにつながるのかを授業者が理解することにより、夢TRY科のねらいに迫るための具体的な学習活動につながります。

その一つとして、振り返りのページとなる「学んだことを振り返ろう」の活用です。テキストに書き込むことで、数年後、自分の学びを振り返ることにつながります。授業者がコメントなどをすれば、数年後の子どもたちへのメッセージにもなり、各学年や小中のつながりを意識することができます。

Coは、次のステップを目指して、中学校区の先生方との関わりを進めています。



ごみ収集場所はどこに？～解決策に至るまで～

「ルールをつくるために」

小見出し「ルールをつくるために」は、ごみ収集場所を題材にした学習です。新しい住宅が建ち、ごみ収集場所の状況が変化していることをもとに、住人の立場で解決策を出すための方法を学びます。

このことを子どもたちに自分ごととして考えさせるために、立場を変えて2回のワークを行い、立場が変われば意見も変わることを体験します。そして、望ましい解決策に至るまでの必要性を理解していきます。



縄手北中学校での実践

縄手北中学校で実践された様子を参観しました。ワーク2回目の授業でした。前は、自分の考えで話し合いましたが、今回は自分とは違う考えの立場になって話し合いを行いました。前は活発に話し合いが行われたようですが、今回はどのような解決策が必要なのかとみんなで悩む姿が多く見られました。

話し合ったことを交流する場では、率先して発言する生徒の姿が見られました。生徒たちは、立場が変わ

ることで意見が変わることを体験し、みんなが納得できる解決策を考えることの難しさを感じるとともに、十分な話し合いの必要性について理解しました。



授業を参観していると、子どもの発言に驚かされることがよくあります。本時には、「ゴミ収集場所が問題なのか、利用する人がルールを守っていなかったのかかわかっていない状況で場所を変えても、問題の解決にはならない」という意見がありました。テキスト作成時には予想もなかった答えから、新しい学びに気づくとともに、子どもの大きな可能性を感じます。夢TRY科には、正解はありません。子どもと大人が共に学び続けることが重要だと考えます。



テキストP58・59



教育委員会リレートーク

第3回 諸角 教育次長

『子ども』ってすごい！おもしろい！

「夢TRY科」の授業参観はとても楽しいです。

ある小学校での1コマ。「2学期からクレーンが使えるようになったけど、誰がつけてくれたのかな？」の問いに「市長さん」「校長先生」などの答えが飛び交う中、「〇〇議員やで。だって、選挙の演説で言うてたもん」という声。

子どもたちは真剣そのものでしたが、担任の先生をはじめ、授業を参観していた大人は笑いを禁じ得ませんでした。きちんと答えの根拠

まで提示して発言しています。この後、税金の使われ方を探求していく授業が行われましたが、ある児童は振り返りに「...大人は税金を取られるって言うけど、私たちが生活していくのに必要なだから...」と書きました。こういう場面に出会うたびに思うことがあります。子どもはそれぞれ豊かな既有知識や経験を持って授業に臨んでいます。何も知らない真っ白な存在ではありません。子どもはそれぞれ自分の既有知識や経験をベースに、与えられ

た課題を解決していきます。そして、必要に応じて新しい知識や経験、時には友だちのアドバイスを取り入れます。まるでRPG(ロール・プレイング・ゲーム)のようです。

これからの授業で大切なのは、どの教科でも子どもが学ぶ意義と楽しさを感じることです。小中一貫教育の楽しさは、そんな子ども一人ひとりの成長を、文化の違う小・中学校の先生が共有し、語り合う機会が増えることかもしれません。

諸角 裕久